ハイスクールD×D～機械赤龍と静寂な龍帝王

hoi3K

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

どこにでもいる普通の女子高校生の兵藤一誠。

しかし、彼女には神滅器（ロンギヌス）の一つである≪赤龍帝の篭手（ブーステッド・ギア）≫を所有していた。

しかし、彼女の中には２つの謎の神器（セイクリット・ギア）と特殊な力が眠っていた。

これはそんな兵藤一誠が繰り広げる不思議な話。

ハイスクールＤ×Ｄとゴジラシリーズとのクロスオーバーです。

ゴジラシリーズに出てきた怪獣や兵器などが多々あると思いますが、無理な方を『戻る』を押すことをお勧めします。

目　次

設定 ―――――――――――――― 1
第1章「旧校舎のディアボロス」
第1話「謎の男の子、養っています」
15
第2話　「告白されて、殺されました」
――――――――――――――― 26
第3話　「良く分からないけど・・・・・・
悪魔になったそうです」――――― 39

設定

・兵藤一誠

本作主人公。駆王学園に通う平凡な女子高校生。いつもは『僕』、家や部活中は『私』になっている。両親は小さいときに事故で亡くなっており、現在は一人暮らしをしている。学園ではかなり有名であり、成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗のこともあり、男女関わらずから絶大な人気を誇っているおり、学園のアイドル的存在になっている。

性格は優しく、お人好しな所があり、普段から何事にも冷静にでいるが実は結構なドジ

ッ娘だったりするのでオカルト研究部では癒し系キャラの一人になっている。後に異世界の特殊能力持つ戦闘員『尾崎真一』の意志とその力の『カイザー』の力を引き継いでおり、『禍の団（カオス・ブリゲード）』のある一部の存在から目を付けられることになる。

好きな事：料理、掃除、子供の世話

嫌いな事：不衛生、ホラー映画、子供に暴力を振るう人

苦手な事：性関連全般

所有神器

・≪赤龍帝の篭手（ブーステッド・ギア）≫

赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）・ドライグが封印された神器。神滅具の一つ。

一誠の両親が死んだ際に、目覚めてそれ以降父親の様に見守っている。

能力は原作通り、１０秒ごとに自分の能力を2倍していく。

発動音声

・倍加～〈Ｂｏｏｓｔ！〉　・第二形態～〈Ｄｒａｇｏｎ　ｂｏｏｓｔｅｒ！〉

・倍加解放～〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！〉　・飛行～〈Ｊｅｔ！〉

・第三形態～〈Ｄｒａｇｏｎ　ｂｏｏｓｔｅｒ　ｓｅｃｏｎｄ　Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ！〉

・譲渡～〈Ｔｒａｎｓｆｅｒ！〉　・倍加解除～〈Ｒｅｓｅｔ〉　・機能停止～〈Ｂｕｒｓｔ〉

・禁手化～〈Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！〉　・アスカロン使用～〈Ｂｌａｄｅ！〉

・禁手発動カウントダウン～〈Ｃｏｕｎｔ　Ｄｏｗｎ！〉

・覇龍発動～〈Ｊｉｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ〉

・《鋼龍王（アーセナル・アームズ）の装甲》

銀の守護龍（サベージョン・ドラゴン）・機龍の魂が封印された神器。

異世界で黒き破壊龍（クローズ・ドラゴン）・ゴジラの細胞を元に人に作られた最初は意志無き戦闘兵器で人々の希望だった。ゴジラとの最後の戦闘中に

え共に海に
の後、ゴジラ
れこの世界に
上げる能力。性
りの物をもっ
『中條義人』
までの一誠が
に応じて勝

自身の意志に目覚め、身動きが取らなくなったゴジラを抱きかか沈んだ（『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ　東京ＳＯＳ』より）。そは自力で抜け出し機龍は海の中に現れた時空の歪みに巻き込ま辿りつき神器になっていた。
能力は１０秒ごとに創造力を高め自分の想った機械兵器を作り格はボーっとしていて頼りなさそうだが戦闘技術や知識はかなており、元の世界で最後まで自分のメンテナンスをしてくれたに恋心を抱いている。戦闘時は元々機械だったこともあって今戦闘に使用した武器や装備などを全て記憶しており、一誠の戦闘

手に出したりする。

発動音声

・機動～〈Ｓａｌｖａｔｉｏｎ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ！〉

・創造～〈Ｃｒｅａｔｅ！〉

・召喚～〈Ｃｒｅａｔｉｏｎ！〉・禁手化～〈Ｓａｌｖａｔｉｏｎ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！〉

召喚武器

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１～尻尾　出典：ゴジラ×メカゴジラ（２００２年）

鋼鉄の尻尾が装備される。

常に電気が発していので触ることは難しい。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×２～ブラスト・ボム　出典：ゴジラ　２０００　ＭＩＬＬＥＮＮＩＵＭ

本体内部に蓄積された火力を特定方向に放出して大爆発する単

一指向性爆弾の一つ。誰でも起爆できるようにスイッチがある。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×３～レールガン（右腕）　出典：ゴジラ×メカゴジラ

（２００２年）

右手の甲に装備される、高速連射が可能なレールガン。
威力は低く、主に先制攻撃や牽制に使用される。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×４～ロケットランチャー　出典：ＧＯＤＺＩＬＬＡ　ＦＩＮＡＬ　ＷＡＲＳ

Ｍ機関が使用していたロケットランチャー

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×５～小型メーサー銃　出典：ＧＯＤＺＩＬＬＡ　ＦＩＮＡＬ　ＷＡＲＳ

Ｍ機関の尾崎と風間がエビラ戦で使用していたもの

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×６～メーサーブレード（右腕）　出典：ゴジラ×メカゴジラ（２００２年）

右手の甲から出現する電気を帯びた剣。
突き刺すなどし、敵体内で電撃を送り込むことが可能。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×９～バックユニット（両肩）

出典：ゴジラ×メカゴジラ、ゴジラ×モスラ×メカゴジラ　東京ＳＯＳ

背部に装備される大出力ブースターを内蔵したユニット兵

器。

ユニットを強制排除し敵にぶつけ爆破する戦法が可能。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×９＋１～多連ロケット弾　出典：ゴジラ×メカゴジラ

バックユニットに追加されるロケット弾。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×９＋１＋１～２４連装ロケット砲　出典：ゴジラの逆襲

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×９＋２～多目的誘導弾　出典：ゴジラ×メカゴジラ（２００２年）

バックユニットに追加される、曲射弾道タイプの小型ミサイル。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×９＋２＋１～フルメタルミサイルランチャー

出典：ゴジラ　２０００

ＭＩＬＬＥＮＮＩＵＭ

多目的誘導弾のミサイルの特性を変え、爆薬の類は一切使わず、硬度

の高い金属を使い、魔力を纏わさなくても幾重にも重ねられた１０メー

トルの鉄筋コンクリート10枚を貫通することが出来る。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×９＋２＋２～推進式削岩弾Ｄ―０３

出典：ゴジラ×モスラ×キングギドラ

大怪獣総攻撃

多目的誘導弾のミサイルの特性を変え、ミサイルの先端に装着し発射され、命中前に推進起動部と装甲が分離。標的に命中した後、高速回転するドリルによって標的の内部に進行し爆破する。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１０～メーサー光線銃　出典：ゴジラ×メカゴジラ（２００２年）

パラボラ型の照射装置を搭載するメーサー銃。

出力は１０万ボルト（モデル：６６式メーサー殺獣光線車）。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１０＋１～メーサー光線銃・改　出典：ゴジラ×メカゴジラ（２００２年）

メーサー光線銃の改良型。出力が１５万ボルトに上がっている。

（モデル：９０式メーサー殺獣光線車）
〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１１～メーサーユニット（両肩＆両腕）　出典：ゴジラｖｓモスラ
両肩にメーサー砲（出力は８０万ボルト）を２基搭載し、支援用に右腕に３砲ガトリングと、左腕に一発砲塔型の簡易ロケット弾を装備される。

（モデル：９３式メーサー攻撃機）
〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１１＋１～メーサーユニット２（両肩）　出典：ゴジラｖｓモスラ
形はバックユニットに類似しておりロケット弾砲塔部にメーサー（出力は２００万ボルト）にミサイル部に８連装ミサイルランチャーが装備される。

（モデル：９３式自走高射メーサー砲）
〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１２～一砲塔式メーサー砲（背中）　出典：ゴジラｖ

ｓビオランテ
５００万ボル
る。
パラボラ式砲塔を使用しており威力が上がっている（出力は
ト）。支援用に２基の８連装ミサイルランチャーが配備され
（モデル：９２式メーサー戦車）
〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１２＋１～一砲塔式メーサー砲２（背中）　出典：ゴ
ジラｖｓデストロイヤー
レーザー発射部のパラボラは、４枚の反射収束版で構成さ
れ、非使用時
は花の蕾のように閉じており使用時になると開くように
なっている
（出力は１０００万ボルトの超低温レーザー）。支援用装備
は一砲塔式メー
サー砲と同じ（モデル：９５式冷凍レーザータンク）
〈Ｃｒｅａｔｅ〉×１５～ハイパーメーサー砲（銃）
出典：ゴジラ×モスラ×メカゴジ

ラ　東京ＳＯＳ

レールガンの１０倍の威力を誇る強力なメーサー砲。

〈Ｃｒｅａｔｅ〉×２０～絶対零度砲（アブソリュート・ゼロ）（銃）

出典：ゴジラ×メカゴジラ

（２００２年）

―２７３．１５℃という絶対零度の光弾を発射、直撃した物体を一瞬で凍結し

さらにはわずかな衝撃で分子レベルまで破砕してしまう。

極めて強力な兵器だが、発射には多大な魔力を使用し一誠自身を動けなくしてしまう

ので多用はできない。

・≪滅龍王（デーリーション・バック）の背甲≫

黒き破壊龍（クローズ・ドラゴン）・ゴジラの魂が封印された神器。

異世界の人の水原爆実験により古代眠りについた恐竜が核により突然変異し

王。

地球に突如に海に潜り力。

闘時や訓練上げている。へに憎みがも争わなく

目覚め、それ以降人間世界に多大な被害をもたらしてきた怪獣のそして銀の守護龍（サベーション・ドラゴン）・機龍との戦闘後、現れたX星人との戦いでカイザーキドラを倒した後、ミニラと共その後生涯を終え、魂のみがこの世界に入り神器となった。

能力は１０秒ごと破壊力を上げいき、自信の攻撃力に変える能性格は活発な性格で、いつも一誠の戦闘訓練などを行ている。戦時では元の世界での自分自身の膨大な戦闘経験から一誠を鍛え機龍とは姉妹関係の様なもので元の世界では争っていたが、人間カイザーギドラの闘いで共闘したことにより消えており、機龍と

なり仲良く一誠の中で暮らしている。

発動音声

・機動～〈Ｃｌｏｓｅ　Ｄｒａｇｏ　Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ！〉・消去～〈Ｅｒａｓｅ！〉

・破壊～〈Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ！〉・禁手化～〈Ｃｌｏｓｅ　Ｄｒａｇｏ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！〉

・グレートフィス

≪静寂の龍帝王（サイレンス・ドラゴン）≫と呼ばれる強力なドラゴンで、三大勢力の一つをいとも簡単に潰せる力を有している。強さは≪真なる赤龍神帝（アポカリュプス・ドラゴン）≫・グレートレッドや≪無限の龍神（ウルボロス・ドラゴン）≫・オーフィスの次に強いとされいるが今だ成長途中で二匹からは「いずれ自分たちを超える存在になる」と言われている。三大勢力の争いごとには興味を示してはいないが三大勢力のトップ（四大魔王、アザゼル、シェムハザ、ミカエル、カブリエル）とは結構な繋がりを

持っている。冥界が旧魔王派との戦争が終結した後に何処かで深い眠りについていた。

グレートレッドやオーフィスとは兄姉の様な関係で二人の事を『お兄ちゃん』、『お姉ちゃん』と呼んでいる。グレートフィスの血にはオーフィスの蛇と同じく力を上げる能力を持っており、ドラゴン状態の爪には更に力が高まる能力が秘められているが普段からドラゴンの姿にならないので採取はほぼ不可能。

第1章「旧校舎のディアボロス」
第1話「謎の男の子、養っています」

～???　side～

???

「はぁ～」

ソファに座りながら貯金通帳を見て溜息をついている私・・・・・・兵藤一誠と言います。

一誠

「はぁ～・・・・・今月も厳しいなぁ・・・・・・」

今月の通帳の残高と睨めっこしながら

一誠

「水道光熱費はこれ以上落とせないし・・・・・・食費もこれ以上は・・・・・・やっぱバイト増やすしかないかなぁ。でもこれ以上増やすと学校生活に支障が出ちゃうからなぁ・・・

・・・やっぱり無理かな・・・・・・・はぁ～・・・・・・・」

私はかなりシビアな生活を送っている。

毎日の生活がキツキツで2、3個のバイトを掛け持ちして1週間全部にシフトを入れても、毎日の

生活費・・・・・・主に食費で消えていくの。

その原因が

???

「・・・・・・・すぅ・・・・・・・すぅ・・・・・・・」

私の膝の上に頭を乗せて寝ている5、6歳の男の子・・・・・・フィス。

この子こそがキツキツ生活の原因・・・・・・

―回想―

それは1ヶ月前のことだった。

一誠

「ふぅ～・・・・・・今日もバイトも終わったし、買い物もバッチリ！

今日は何作ろうかな～？」

バイトの帰り道、この日の夕飯を考えていると
キュウウウウウウ・・・・・・・・・
一誠
「？」
何処からか可愛いお腹の音が・・・・・・・
キュウウウウウウ・・・・・・・・
あっ・・・・・・また聞こえた
一誠
「誰かいるのかな？」
少し先に進むと
???
「・・・・・・・・」
一誠
「・・・・・・・ぁ」
そこにボロボロに男の子が座り込んでいた。
一誠
「・・・・・・どうしたの？」

???
「・・・・・・・か・・・いた」
一誠
「何?」
???
「お腹・・・空いた・・・・・・」
さっきから聞こえたお腹の音はこの子だったんだ・・・・・・・
一誠
「え～と・・・・・・お父さんやお母さんは?」
???
「・・・・・・・いない」
いきなり暗い事聞いちゃったよ!
えーと! えーと!
一誠
「・・・・・・・じ、じゃあ、住んでいる場所は!?」
???
「・・・・・・・ない」

あ～!!　またやっちゃったよ!!
どうしよう!?　どうしよう!?
一誠
「・・・・・・・私の家に来る?」
???
「・・・・・・・何で?」
一誠
「え?　それはお腹空かしているし・・・・・・可哀そうだし・・・・・・私の家に行けばご
飯食べさせてあげるから・・・・・・来ない?」
うぅぅ・・・・・・やっている事が犯罪者みたい・・・・・・
???
「いいの?」
一誠
「うん!　いいよ」
???
「・・・・・・ついて行く」

良かった～

あっ、そうだ。聞いてないことがあったんだ

一誠

「ねぇ？　名前なんて言うの？　僕は兵藤一誠。イッセーって呼んでね。君は？」

???

「・・・・・・フィスはグレートフィス・・・・・・フィスでいい」

グレートフィス？

何だか変わった名前・・・・・・まぁいいや

一誠

「よろしくね。フィス」

―回想終了―

保護したまでは良かったけど、この子の食欲があまりにも凄過ぎた・・・・・・

フィスはだいの大人４人分の食事を一回に取るから・・・・・・私の家計簿が・・・・・・

???

『そんな奴なら早く追い出せば早いことだ』

私の左腕から声が聞こえた。
一誠
「そんな事、言っちゃダメ。ドライグ・・・・・・・この子は子供なんだから」
ドライグ
『むぅ・・・・・・それはそうだが・・・・・・・』
私は左腕のそう話しかけた。
その声の主はドライグ・・・・・・・嘗て天使、堕天使、悪魔の三大勢力の闘いの中突如現れた二
天龍の一角である赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）。
その後神器（セイクリット・ギア）に封印されている容態・・・・・・確か神様でも殺せてしまう神滅具（ロンギヌス）って呼ば
れるものに含まれていて、名前が≪赤龍帝の篭手（ブーステッド・ギア）≫って呼ばれる１０秒ごとに自分の力を２倍してい
く凄い神器（セイクリット・ギア）だとか・・・・・・でも１回も使ったことないけど・・・・・・
それにまだ２つほど神器が宿っているらしいけどまだ寝ているみたいってドライグが言ってい
た。

ドライグ
『しかし、こいつの食費で相棒も大層迷惑しているんだろ？』
一誠
「それは・・・・・・・ちょっとあるかもしれない」
ドライグ
『だったら・・・・・・「でもね」・・・・・・むう？』
一誠
「でも・・・・・・」
私はフィスの頭を撫でながら
一誠
「この子の寝顔を見てると何か落ち着くの・・・・・明日からも元気が出てくるの。
家で
ドライグしか話す相手が居なかった私に出来た二人目の家族だから・・・・・・」
ドライグ
『そうか・・・・・・』
一誠
「・・・・・・よし！　明日も頑張って行くよ！」

ドライグ
『ふっ・・・・・・それでこそ相棒だ・・・・・・』
ドライグは元気を出した私を見て、安心していた。

～ドライグ　ｓｉｄｅ～
相棒が元気を出したのはいい
ドライグ
『（・・・・・・が）』
一誠が保護した子供の存在がどうにも謎だった。
ドライグ
『（何故こいつがここに来たのだ・・・・・・≪静寂（サイレンス・ドラゴン）の龍帝王≫・・・・・・グレートフィ
ス・・・・・・）』

こいつは静寂の龍帝王・・・・・・・別名、サイレンス・ドラゴンと呼ばれる、この世界の存在す
る最強のドラゴンの一体だ。
全力を出さずとも三大勢力の一つをいとも簡単に潰せる力を有しており、その強さは
≪
真なる赤龍神帝（アポカリュプス・ドラゴン）≫・グレートレッドや≪無限の龍神（ウルボロス・ドラゴン）≫・オーフィスの次に実力を誇り、
今だ成長し
続けいずれは2体を超えると言われているドラゴンだ。
ドライグ
『（しかし・・・・・・・１００年前程から行方が分からなかったはず・・・・・・何故、今に
なって・・・・・・・）』
そう俺が2つ前の宿主の元に居た時だったが、そもそもこいつは三大勢力や戦争には興味を示し
ていない・・・・・・・が、何故か天使、堕天使、悪魔のトップと繋がりを持っている可笑しい
ドラゴンだったが、１００年ほど前・・・・・・冥界で悪魔が旧魔王派との内戦が終

了した後に消
息が全く掴めなくなっていたはず・・・・・・
ドライグ
『（やはり・・・・・・こいつの考えている事は良く分からん）』
俺の謎は深まるばかりだ・・・・・・いつも変な行動しかとらないからな。
考えても無駄か・・・・・・

しかし、オーフィスとグレートレッドの方が心配だ
アイツらはグレートフィスの事になると暴走しがちになるからな
なにか問題が起こらなければいいが・・・・・・

第２話　「告白されて、殺されました」

～一誠　ｓｉｄｅ～

はぁ～・・・・・・今月も何とかなりそう・・・・・・・

フィスの食べる量が尋常じゃないから今月もキツキツだけど・・・・・・・

フィス

「・・・・・・・」キュウウウ・・・・・・・

でも・・・・・・・

フィス

「・・・・・・・」キュウウウ・・・・・・・

これはこれで・・・・・・・

フィス
「・・・・・・・イッセー・・・・・・・」　キュウウウ・・・・・・・・
か、可愛すぎる／／／／／／
一誠
「はい出来たよ。ホットケーキ３０枚♪」
私はさっきまで焼いていたホットケーキをお皿に盛りつけてフィスの前に置いた。
フィス
「イッセーは？」
一誠
「えっ!?　私は・・・・・・お腹空いてないし・・・フィスが全部食べちゃっていいよ！」
フィス
「（コクッ）」
私は空腹を我慢して、フィスにホットケーキを勧めた。
実際はもうお腹ペコペコだよ!!　私も本当はホットケーキ食べたいよ!!
でもフィスの事、考えると我慢しないと
・・・・・・・でも・・・・・・・

フィス
「・・・・・・・モグモグ・・・」
一誠
「・・・・・・・」 ボタボタボタ・・・・・・・・（鼻血）
本当に可愛すぎる／／／／／／
フィス
「・・・・・・・イッセー・・・・・・・鼻血」
一誠
「はっ！ （ゴシッゴシッ） じゃ、じゃあフィス。私は学校に行ってくるから食べ終わったら
ちゃんとお皿を水に浸けておいてね」
フィス
「（コクッ） いってらっしゃい・・・・・・」
一誠
「うん。行ってきます♪」
フィスの笑顔を見たことだし元気に学校だ～

ここは駆王学園。
元々は女子高で近年の少子化の影響で男女共学になった学園。
でもいまだ女子生徒の比率が高くて学園全体で７：３の割合で女子生徒の方が多いの。
しかもここは悪魔が管轄してる土地らしく、ドライグの話では３年生のリアス・グレモリー先輩
が上級悪魔で、その他にもリアス先輩と同じく『二大お嬢様』として有名な姫島朱乃先輩、『学
園の王子』こと２年生の木場祐斗くん、『学園のマスコット』として有名な１年生の塔城子猫ちゃ
んが転生悪魔らしい。それ以外も生徒会の人も悪魔らしい・・・・・・
そして今
女子生徒１
「きゃぁぁぁー!!　一誠さんよ～」
女子生徒２
「お、おはようございます。一誠さん」

一誠
「おはよう♪」
女子生徒2
「あぅ／／／／／／」

毎朝こんなこんな感じで通学路が賑わっていた。
入学してからずっとこの調子で、いつも間にか『学園の天使』として有名になっていた。
何で？
ドライグ
『それはそうだろう・・・・・・相棒は容姿端麗、成績優秀、運動神経も良くおまけに人がいい。誰
もが崇めたくなるだろう・・・・・・普通は』
そうかな～？
皆と同じことしているだけだよ
ドライグ

『・・・・・・もういい』
何で拗ねるの!?
意味が分からないよ!!

キーン　コーン　カーン　コーン！
一誠
「・・・・・・んにゅ～」
はぁ～今日も授業も終わったし、早くバイト行かないと・・・・・・
私が校門を過ぎた時
???
「あ、あの!!」
一誠
「・・・・・・私に何か?」
???
「私、天野夕麻って言います。少し時間貰ってもいいですか?」
一誠

「え？　あ、はい・・・・・・・」
夕麻
「ここで話すも何ですから近くの公園にしましょう」
何なんだろう？　初めて会ったし見たこともない娘だし・・・・・・・
ドライグ
『相棒、こいつは堕天使だぞ』
え、そうなの？
でも堕天使さんが私になんの様なのかな？
ドライグ
『案の定、神器だな』
赤龍帝の篭手を？　なんのために？
ドライグ
『大抵は自分の勢力に引き込むだろうな』
・・・・・・断っても大丈夫だよね？
ドライグ
『そんなのは知らん』
そんな～・・・・・・・

ドライグ
『安心しろ・・・・・・殺されそうになったら俺を使え』
使えるの？
ドライグ
『そもそも俺と意志疎通している時点で使えるんだからな』
じゃあ、その時になったらお願いね
ドライグ
『あぁ、任せておけ』

私は夕麻ちゃんに連れられて噴水のある公園に着いた。
一誠
「それで私に用事って何ですか？」
夕麻
「えっと・・・・・・私と付き合ってください!!」
え？
一誠

「・・・・・・ごめんなさい。もう一度行ってください」

夕麻

「ですから私と付き合ってください!!」

一誠

「えぇぇぇぇぇぇ!!」

どういうこと!?

私、女だよ？　私の事、男だと思ているの!?

それとも、この娘は本当は男の人？　最近、有名になっている男の娘って人？

でもでも、ちゃんと胸あるし声もしっかりと女の子の声だし・・・・・・一体どういうこと!?

一誠

「あの・・・・・どういうことなんですか？　私、れっきとした女ですけど・・・・・」

夕麻

「分かっています・・・・・・でも、私は貴女に一目惚れしました!!」

えぇぇぇぇぇぇ!!

これって・・・・・・・！　その・・・・・・・百合ってやつじゃ／／／／／

夕麻

「（ニヤッ）」
ドライグ
『相棒!!　右に避けろ!?』
え？
ドライグの言った通りに咄嗟に避けると
ザスッ!!
さっきまで私が立っていた場所に光っている槍が刺さっていた。
一誠
「何・・・・・・・これ？」
夕麻
「へぇ～人間にしてはいい勘してるじゃない」
一誠
「・・・・・・・」
そこには黒い翼を生やした夕麻ちゃんが空を飛んでいた。
夕麻
「・・・・・・ごめんなさいね。貴女は私達の計画に邪魔な存在なのよ。中々、可愛いしペッ

トとして飼うのも良かったのだけど、危険分子は少しでも排除しておきたいのよ・・・・・・・

そういう訳だから・・・・・・・死んでね♪」

夕麻ちゃんの手に光の槍が握られていた。

一誠

「・・・・・・・っ！」

ドライグ！　お願い！

ドライグ

『あぁ、任せろ！』

光の槍が投げられた瞬間、私の左腕に何かが装着された。

ガッキン！

それで、光の槍を弾き飛ばした。

一誠

「・・・・・・・で、出来た」

夕麻

「ちっ・・・・・・咄嗟に発動したのか！　でも、拍子抜けね。単なる≪龍の篭手（トワイトゥ・クリティカル）≫だった

なんてね」
一誠
「・・・・・・・早く逃げないｔ・・・・・・・・〈ザシュ！〉・・・・・・・・え？」
バッタン
逃げようと振り返ろうと瞬間、後ろから光の槍で腹部を貫かれて倒れていた。
???
「何をしているのですか、レイナーレ様」
夕麻？
「逃げられると面倒だったから、助かったわドーナシーク・・・・・・・」
夕麻ちゃんは私の方を見て
夕麻？
「貴女のあの時の反応は結構面白かったわよ・・・・・・・」
そして黒い翼を羽ばたかせて飛んでいった。

私・・・・・・死ぬのかな・・・・・・・
ドライグ

『相棒!!　諦めるな!!』
ゴメンね・・・・・・ドライグ。
貴方の事、全然使ってあげなくて・・・・・・
ドライグ
『そんなことを言うな！　死ぬなど俺が許さんぞ!?』
嬉しい・・・・・・私の為に怒ってくれて・・・・・・
もう・・・・・・ダメみたい・・・・・・目の前が真っ暗に・・・・・・・・
フィス・・・・・・ずっと一緒に暮らしていきたかったな・・・・・・

???
「あら？　へぇ・・・・・なるほど、面白いことになってるわね。いいわ、貴女を生かしてあげる。私の
下僕として生きなさい」

第３話「良く分からないけど・・・・・・悪魔になったそうです」

～一誠　ｓｉｄｅ～

あれ・・・・・・？

私、どうしたんだっけ・・・・・・・？

夕麻ちゃんって娘に襲われて・・・・・・そのまま後ろのオジサンの槍で刺されて・・・・・・

―・・・・・・・・ぇー・・・・・・・・―

ん？

―・・・・・・・・い・・・・ぇー・・・・・・・・―

誰かが呼んでる・・・・・・・誰だろ？

―・・・・・・・いっせー・・・・・・・・・―
この声って・・・・・・・・

～ｓｉｄｅ　無し～
一誠が目を覚ますと、いつも通りの部屋のベットに寝ていた。
フィス
「・・・・・・・・イッセー、起きた」
一誠
「・・・・・・・・アレ？　フィス・・・・・・・？」
目の前に、勝手にベットに潜り込んでいたであろうフィスがいた。
フィス
「・・・・・・・・イッセー・・・・・・・おはよう・・・・・・・」
一誠
「・・・・・・・・おはよう、フィス・・・・・・・」ナデナデ
フィス
「・・・・・・・・うにゅ～・・・・・・・」

一誠はフィスの頭を撫でながら、起き上がり時計を見ると６：４５になっていた。
一誠
「じゃあ、朝ごはんにしようか？」
フィス
「（コクッコクッ）!!」
フィスは嬉しそうに首を振り、下に駆け下りていった。
一誠
「・・・・・フィス・・・・・今日も可愛いな／／／／／／　（それより・・・・・・）」
一誠はフィスの姿に萌えながら、昨日の事を考えていた。
一誠
「（誰が家まで運んでくれたんだろ？）」
一誠は昨日、公園で堕天使に光の槍で殺された。
しかし、今一誠はしっかりと生きているし、身体に違和感が少しある程度で特に変わった様子が
ある訳でもなかった。
一誠
「（もしかして、オカルト研究部の人かな・・・・・・？　ねぇ、ドライグ。何か覚

えてな
い？）」
一誠がドライグに声を掛けるものの
・・・・・・・・・・・・・・・・
一誠
「（ドライグ・・・・・・？　ねぇ？　寝てるの～？）」
一誠が何度声を掛けても一向に起きる気配が無かった。
一誠
「可笑しいな・・・・・・いつもなら、起きてるんだけど・・・・・・って早くしないと、
フィスがお腹空かし過ぎて死んじゃうかも!!」
一誠はドライグの事を一旦置いておいて下にいった。
フィスの事になると急に目の前が見えなくなる一誠さんでした。

一誠はいつも通り学校に行き、昨日の事についてオカルト研究部の部員に聞こうとしたが

一誠
「え？　いないの？」

女子生徒
「はい・・・・・・今日はお休みしてますけど・・・・・・・」

一誠
「そうなんだ・・・・・・ありがとね」

と一誠が教室を去った直前

女子生徒
「きやぁぁぁぁぁ!!　一誠さんが木場きゅんを探してる!?」

女子生徒
「これってまさか・・・・・・愛の告白!?」

女子生徒
「『学園のイケメン』と『学園の天使』が・・・・・・・!?」

女子生徒

「見逃せないわ!!　皆、一誠さんを行動を常に把握するのよ!!」
女子生徒全員
「「「「「おぉーーーーーーー!!!!」」」」」
一誠
「さっきの教室が騒がしいけど・・・・・何かあったのかな?」
一誠の知らぬまに、飛んでもない誤解が飛び交うのであった。

その後も一誠は、オカルト研究部の生徒を当たってみたが全員が休みとの事でこの日は普通に
帰ることになった。

～一誠　ｓｉｄｅ～
はぁ～、結局何も分からなかったな～　まさか、オカルト部の全員が休みだなんて・・・・・・
そんな事より・・・・・・バイト全部クビってどういう事!?　私、何かしたっけ!?

昨日はよく分からない内に家にいたし、バイトには行ってないけど・・・・・・それでもなんで
他の二つまでクビにされてるの!?
それにドライグは起きてこないし・・・・・・聞きたいことあるのに・・・・・・・・
私がブツクサと心の中で愚痴っていると
一誠
「・・・・・・・ぁ」
昨日の公園に辿り着いていた。
一誠
「・・・・・・・・・・・・・・・はぁ～」
これからどうしよう・・・・・・？
次のバイトが決まるまで、どうやってフィスにご飯食べさてあげればいいんだろ？
???
「これはこれは・・・・・・悪魔の気配を辿ってみれば昨日我に殺された人間ではないか」
え？
上を見上げると昨日、私に光の槍を刺したオジサンが飛んでいた。

一誠
「・・・・・・・・・・・・・・・」
ドーナシーク
「そうか・・・・・・・貴様、悪魔に転生したんだな・・・・・・・ならば殺すしかないな!!」
一誠
「・・・・・・・っ!!」

～ｓｉｄｅ　無し～
ザクッ!!
いきなり投げつけられた槍に何とか反応して、避けた一誠。
一誠
「・・・い、一体何なんですか!?　何で私をね・・・・・・〈ヒュン!!〉・・・・・・っ!?」
ドーナシーク
「仕方があるまい・・・・・・貴様が悪魔となった以上、消すしかあるまい!!」

一誠はドーナシークの攻撃に反応して言っているが、武器の無い一誠が圧倒的に不利に立たされていた。

その時、

カァー!!

一誠とドーナシークの間に赤い魔法陣に出現し、そこに紅い髪をした駆王学園の制服をきた女子生徒が立っていた。

～一誠　ｓｉｄｅ～

一誠

「・・・・・・・リアス・・・グレモリー・・・・・・・先輩?」

昨日のオジサンの攻撃を必死で避けている中、突然リアス・グレモリー先輩が出てきた。

ドーナシーク

「紅い髪・・・グレモリーの者か?」

リアス
「そうよ、私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ・・・・・・」
えっと・・・・・・リアス先輩？　何でそんなに不機嫌そうなんですか？
それに殺気が・・・・・・・凄いです・・・・・・・
ドーナシーク
「そのグレもリーの次期当主が一体何のようだ？」
リアス
「それは、私の台詞よ。あなた、私の下僕に何をしようとしての？」
・・・・・・アレ？　下僕？
私、先輩の下僕になった覚えはないんだけど・・・・・・？
ドーナシーク
「ほう、それは失礼した。夜道を一人でウロウロしていたものだからな、はぐれと思い、狩ろ
うと思っただけだ・・・・・・しかしリアス・グレモリーよ。自らの眷属はしっかりと管理し
ていた方がいいぞ？　私のような者が現れて狩るかもしれねしな」
リアス

「忠告痛み入るわ。でも心配ないわ。もし私の眷属とこの町で何かするような事があれば、問
答無用で消し飛ばすから」
そういうとあのオジサンが飛んでいちゃった・・・・・・・
一誠
「えぇっと・・・・・・・何が何だか・・・・・・・？」
リアス
「ごめんなさい。何にも説明してないせいでこんな目に遭わせてしまって・・・・・・」
一誠
「え？　い、いえ!?　何処も怪我してませんし、謝らなくても大丈夫ですよ!!」
リアス
「そう・・・・・・・じゃあ、説明は明日でもいいかしら？」
一誠
「はい！　私も明日聞きにいこうと思っていた所ですし」
リアス
「分かったわ」
そのままリアス先輩は魔法陣らしきもので帰って行った。

一誠
「ふぅ～・・・・・・何だったんだろう?」
いきなり、色んな事があって訳が分からないよ・・・・・・
ん? ちょっと待って・・・・・・さっきのあのオジサンが・・・・・・
『仕方があるまい・・・・・・貴様が『悪魔』となった以上、消すしかあるまい!!』
え? 悪魔・・・・・・
一誠
「私・・・・・・悪魔になっちゃったのーーーーーー!!??」

よく分かりませんが・・・・・・悪魔になりました・・・・・・

その頃、一誠の家では

キュウウウウウウ・・・・・・・・・キュウウウウウウ・・・・・・・・・
キュウウウウウウ・・・・・・・・・キュウウウウウウ・・・・・・・・・
鳴き止まない腹の虫・・・・・・・
フィス
「・・・・・・・イッセー、遅い・・・・・・・」キュウウウウウウ・・・・・・・・・
家の中で、ソファで横になっているフィス。
フィス
「・・・・・・・お腹・・・・・空い・・・た」キュウウウウウウ・・・・・・・・・

その後、家に戻ってきた一誠の悲鳴が近隣に響き渡ったのはまた別の話